

Title	ゴンクール兄弟『ルネ・モプラン』(第三十一～三十五章)(翻訳)
Sub Title	Edmond et Jules de Goncourt Renée Mauperin (chapitres XXXI-XXXV) (traduction)
Author	山本, 武男(Yamamoto, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2016
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.63 (2016. 10) ,p.156(29)- 184(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20161031-0184

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゴンクール兄弟『ルネ・モプラン』

(第三十一～三十五章) (翻訳)

山本武男

これまでのあらすじ

『ジェルミニ・ラセルトゥ』(一八六五年刊行)と並ぶゴンクール兄弟の代表的長編小説『ルネ・モプラン』(一八六四年刊行)。タイトルは、十九世紀半ばのパリ近郊に住むブルジョワの核家族の末娘の名。長女アンリエットは両親の勧めを素直に聞き入れ「適齢期」を逃さず人妻の座に収まっている。長男アンリはパリで一人暮らしをしつつ、経済評論家として活動、サークルやサロンに顔を出して人脈を築くことに余念がない。そんな中、富豪のブルジョ夫人に接近、彼女の愛人となるも、その真の目的はその娘、ノエミの夫となつてブルジョ家の財産を相続することにあつた。箔を付ける為、政界との人脈を用いて自身の名前に没落して絶えたと思しき貴族の苗字を加えることにも成功した。それを知つた世間知らずで初心な、父親を理想の男性として慕い、結婚はしないと「決心」している次女ルネは混乱する。このルネには、幼

馴染の男友達のドノワゼルがいるが、彼は当時流行の社会主義思想に強く感化されている。

〔翻訳〕

三十一

「そうだ！ 妻がアングル画伯の手になる肖像画を手元に置きたがりましてね……あなたもご覧になったでしょう……妻と似ていないんですよ……それでもアングル画伯の作品ですからね……で、彼が幾ら請求してきたか分りますか？ 一万フランですよ！ わたし、払いましたけどね、でもあれじゃあ搾取だと思いますが、まあ、いつも資本の闘争状態ですからね……有名だと言うだけで、好きだけ払わせですよ！ 芸術家だから、値段だの、料金だのの相場はもう無視して構わないんだって感じですよ！ わたしに不当な金を要求する権利を有しているという訳ですよ……ですから、わたしから百万ほどの金をむしり取ることであり得るでしょう。相手の財産に応じて支払わせる額を変える医者みたいなものですよ……まず、わたしが所有しているこの絵が誰を描いたものか、人に分かるだろうか？ そんな疑問の湧くこの絵の取り引きは不正だと言える……そう、一万フランですよ、どうお思ひになりますか？」

暖炉の前に立ち片方の足を差し出して暖めながら、こんなふうにもドノワゼルに語りかけていたブルジョア氏は、その足を引っ込めて、もう一方の足をあぶり出した。

「確かに！」ドノワゼルは真面目くさった調子で言った。「まったくその通りですよ……あの手の連中は、自分の評判を濫用しています……お分かりかと思いますが、こういう事態を食い止める方法は一つしかないでしょうね、大革命の際、食料品に対してしたように、才能や傑作に付ける最高価格を法的に決定して発布するといいでしょう。まったく、非常に簡単じゃないですか」

「そうですな！」とブルジョ氏。「それですよ……そうすればとても公平になるでしょう……何故かといえば、要するに……」

ブルジョ家の人々は、その夜、モブラン家での内輪の夕食会に参加していた。二つの家族は、ヴィラクルの名が最初に官報のモニトゥール紙に掲載されてから一年以内とした期限が切れかかっている結婚の日取りを決めるため話し合っていたのだが、この期限を要求したのはブルジョ氏であった。女性たちは結婚祝いの品、シヨール、寶石、嫁入り衣装について話し合った。ブルジョ夫人のそばに坐ったモブラン夫人は、彼女の前で、奇跡を起こした人の前でもあるかのように、うっとりしていた。モブラン氏の顔は、まったくの喜びに輝いていた。

モブラン氏は金銭が放つまばゆさに、要は屈してしまったわけである。この背の高い正直者は、純粹で、厳格で、頑固で、清廉潔白であったが、ブルジョ家のあの莫大な財産は彼の思考のなかに流れ込み、この男のかつての夢と合流し、その実務的な人間としての、高齢者としての、家父長としての、実業家としての直感に語りかけ、感動させた。彼は魅了され、無防備になった。結婚ばなしが成立してからというものの、息子に対してその確固たる能力や上向いてきた運勢に鑑みて評価を高め、息子の変化は別に気にせず、今となつては、名前を変えてしまったことにも文句は言わなくなっていた。父親もまた人間なのである。

この間から気のない、瞑想的で悲しげな様子だったルネもその夜はかなり陽気に振る舞っていた。彼女はノエミの被り物に付いている鳥の羽を息で吹いて面白がっていたが、ノエミはといえば、けうたそうに、心ここにあ

らずといった態度で、臉は閉じかけており、実姉であるダヴァランド夫人の尽きる気配のないおしゃべりに短い返事を与えていた。

「今日では、そこら中の者が金錢を敵視している」ブルジョア氏がしかつめらしくまた話を始めた。「ある種の連盟があるんだ……ほら、サノワでは、わたしは道を作ってやったけれども……その結果！ 彼らがわたしを喜んで迎えていると思うかい？ 一回だつてありやしない……四十八年には、わたしらは大量の麦を提供したが……彼らが何て言ったか分かるかい？ 〈こん畜生……〉奥さま方、お許しください……〈恐れを知れ！〉とかですわね。

じつに立派な方法で感謝してくれますなあ……わたしは模範となるような農場を設立しましたがね、政府に指導者を要請しましたところが、ア、カをひとりよこしましてね、これが金持ちに毒づくことに人生を費やしてきた悪党でして……今でもなお、忌まわしい考えを持った市の評議会と関わりをもっているんですよ。わたしが彼らを働かせてあげているんですけれどもね、だつてそうでしょう？ わたしたちは地方の富者たちだ……そんなわけで、もし革命が起こったら、彼らは城に火を放つだろう……ああ！ 彼らは遠慮することなどないだろう……ある地方では九千フランの税を取り立てた結果、民衆を敵に回したと聞いていますよ！ 彼らは我々を撃ち殺すだろう、決つたも同然だ……二月のことは、ご覧になつたでしょう……ああ！ 民衆と云う奴は！ わたしは大いに彼らについては考えを改めました……今後は民衆が我々のために美しい未来を準備するわけだ、やつてくれたまえ！ 我々は文無したちによつて食い尽くされることになるよ、わたしは予言しておく……見ていて御座なさい……こんな事をわたしは、しばしば考えているんだ……それでも子供がなければ……だつて、財産というものは、わたしにとつては……」

「つまり何をおっしゃりたいのですか？ ご同胞」と近寄りながらモプラン氏が言った。

「わたしは怖いのです、わたしたちの子供たちがある日、食べるものも失つてしまうのではないかと思つてし

まうのですよ、モブランさん……要するにこういうことが言いたいわけでした……」

「子供たちに所帯をもたせられなくなってしまうと云うことですね！」とモブラン氏が応じた。

「ああ！ いったん夫が陰鬱な考えを抱き始めますと……世界の終末について語り始めますと……」とブルジョ夫人が言った。

「奥さま、あなた様がわたくしのような心配事をお持ちでないのを祝福いたします」と言いつつ、ブルジョ氏は自分の夫人のとなりで会釈してみせた。「だけれども、頭が弱くなかったら、恐らく、相当心配になるはずなんだがね……」

「確かに、確かに」とドノワゼルが口を挟んだ。「わたしも、ブルジョさんと同様、金銭は脅威に、非常な脅威に、すごい脅威に晒されていると思いますね……まず嫉妬によって、その感情が、ほとんど全ての革命を引き起こすわけですが……そうして次に進歩によって、この思想が革命を歴史のなかで正当化するのですけれども……」

「それにしても君、陋劣な結末が待っているよ、その進歩ってやつには！ もちろん、わたしは、反革命主義者なんかじゃない……わたしは自由主義者だったし、今でもそれは変わらない……わたしは自由の戦士である……生まれながらの共和主義者だ……わたしは、あらゆる進歩に賛成だ！……けれども財産を否定する革命とやらは蛮行に至る！ 我々は原始状態に戻ってしまう事になるだろう！ 公正さ……それから良心が必要だ。結局のところ、あなた、所有権を否定した社会と云うものを想定できませんか？」

「銀杯のない宝取り競争の宝棒以外の何ものでもなくなってしまう」

「なんてこった！」ブルジョ氏はドノワゼルの言うことを聞かず、かっとなって言った。「わたしは、一生懸命、正直に働いて得たもの……わたしが獲得したものは、わたしのものだ……わたしの子供たちの遺産相続……それ

こそまったく最高の聖域ではないか！ わたしは既に税金が所有権に打撃を与える存在になっていると見ていますんだ」

「どうしよう」ドノワゼルは完全なお人よしのような調子で言った。「わたしの意見は実にあなたのものとおなじですが、さらに申し訳ないように思われるのは」今度は、彼は意地悪そうに付け加えた。「あなたが思っている以上に陰鬱な未来像を抱いていることですよ……実際、貴族を否定する革命は既に起こっているわけ……従って富者に対する革命が起こらないとも限らない……名のある貴族をギロチンにかけたように、大いに富める者を除き去ることだってありうる。モンモランシー氏と名乗れば罪になったのだから、年金五万リーヴル氏は罪人たりうる……明らかにそれがものごとの成り行きである……わたしはこの問題に関してはこの上なく利害を離れているので余計に客観的にお話しできるのですが。わたしなど、あの時代にギロチンに掛けられるいわれはなかったでしょうし、今、没落する理由もありませんから……そんなわけで……」

「しゃべらせてください、あなた、よろしいか」ブルジョ氏は厳かに言った。「あなたはよく理解できていますね……わたしは本当に事の行き過ぎを嘆いております……九十三年は犯罪ですよ、あなた……貴族に対して恥ずべき行為をなした……この点、正直者は皆、同じ意見の筈ですよ……」

モブラン氏は微笑んだが、それは千八百二十二年当時のブルジョウ氏の姿を思い出したからであった。

「要するに」ブルジョ氏は続けた。「状況はまったく同じではないのだ……社会が一新した……基盤を再建し……すべてが変わったのだ……貴族を否定するに際しては、理由、まあ口実と言い換えてもよいものを挙げる事はできた……特権に対して、八十九年の革命は起こされたのだとは言える……わたしは特権を裁きたくはないが……特権は存在してはいた……二つのことには何の脈絡もないが……要するに、人々は平等を欲していたのさ。それは、多かれ少なかれ道理には敵ったことだ……まあ、少なくとも意味はあった……今は、といえば、どこに

特権があるのか、あなたにちよつと訊ねてみたいものですな。ある人と別の人の価値は同じである……普通選挙だつて実施されているではないか……あなたは言うだろう、財産に違いがあるじゃないか？ と。でも、誰だつて稼げる可能性がある……全ての産業は自由なんだ……」

「自由でない産業以外は自由……」

「まあ要するに、誰もがあらゆる事を為しうる可能性があるということだ……知性と勤労あるのみさ……」

「それに好ましい境遇も必要でしょう」とドノワゼル……

「あなた、境遇つていうのはね、作るものですよ！ ほら、社会を見てみてください、我々はみな、成り上がりだ……わたしの父は毛織物商だった……みんな、まあだいたいそんなところさ……それでお分かりでしょう、こういうのが平等ですよ、あなた、真正にして善良なる平等……もはや特権階級はない……ブルジョワジーは民衆から上がってくる、民衆がブルジョワジーにまで上がってくるのだ……望むことなら、わたしは娘のために、伯爵を婿として見つけてやることもできただろう……だが共產主義の思想は、全く以て悪しき本能……悪しき情熱から発しているよ、財産を否定するというのはそういう性質のものだ……人は貧困の救済について、出来もしない美辞麗句を並べ立てている……それなら、わたしは、言わせてもらうが、未だかつて、今ほど民衆のためを思つて世の中が動いている時代はなかったのだ……フランスでは、福祉が進歩している！……肉をけして口にすゝる事が出来なかつたような人々が、週に二回は食べられるようになった……そういう事は事実なんで、それについて、我々の若き経済学者のアンリ氏が説明してくれるに違いないけれども……」

「そうそう」とアンリ。「それは証明されています。二十五年間で、家畜の増加率は十二パーセントでした。フランスの人口は一千二百万の都市生活者と二千四百ないし二千五百万人の田園生活者から成り立っているが、前者は年間一人当たり約六十五キログラム、後者は二十・二六キログラムの肉を消費しています。これらの数字に

関しては、わたしが保証します……確かな事は、最も良心的な推算によれば、千七百八十九年以来、フランスでは十年ごとに、平均的な生活水準は上昇しており、この平均的な生活水準の進歩こそが、国民にとって最も確かな繁栄の印なのだということですから……統計によれば……」

「ああ！ 統計ですか、それは不正確な学問の筆頭ですね！」ドノワゼルが割って入ったが、そうすることでブルジョア氏の考えを逆説交じりに動揺させるのを楽しんでいたのである。「まあ、わたしはすべてを認める事ができますよ、民衆の人生をより長いものにしたとか、以前は口にする事すら出来なかった肉を食べられるようにしているとかの事に關してはですね、そういう利点からあなたは現在の社会構成を不滅なものとしておいてなのですか？ 人は、ブルジョワジーの統治、すなわち金銭の統治を齎す革命を行いましたね、そこであなたは言われる、これでおしまい、他の革命はいっさい要らない、今はもはや正当な革命というものはこれ以上ありません、と……それは本当にごもつともですが、ここだけの話ですがね、どの程度、ブルジョワジーが社会の頂点に決定的な存在として君臨し続けられるのか、わたしには覚束ないので。あなたに言わせれば、政治的な平等が一度みんなに行き渡れば、社会の平等は実現する、それは恐らく可成り当っているでしょうが、それを信じないことで利益を得ている人々にそのことの妥当性を納得させることが重要なのです……ある人と、別の人とはその価値において平等か？ 神の目前においては確かにそうでしょう……そして十九世紀においては誰もが黒い服で正装する権利を持っているわけですし、そうするためにはただお金を払えばいいだけなのです……近代における平等、お望みでしたら、それを一言で要約してみせましょうか？ それは徴兵制度の前に於ける平等ですよ、誰もが射撃し得る一方、三千フランで誰かを自分の身代わりにさせることも出来るわけですね……あなたは特権に就いて話しておいでですが、それはもう存在していません、それは確かです……ですがバステューユもまた破壊されましたが……結果は、ただその子供たちが生まれたただけでした……さあ！ 正當に考えてみましょう、

わたしは率直に認めておりますが、まだ、人間の地位、名前、財産は出来る限り安く見積もられ、軽んじられて
います……それなら、罪を犯しなさい、例えば、貴族院議員の様になりなさい、そうなれば、死刑台から逃れら
れ、毒を盛ることを許される……よく注目して頂きたいのは、人々は理にかなった事をしてきたと、わたしが考
えている事です……でもこのような事を確認するのは、不平等がどれほど押し返して来ているかをあなたにお伝
えしたいからなのです……そう、確かに！ 不平等が蔓延する地上を眺めれば、何処に平等があるのかを探して
見ざるを得ない……相続権、ですか？ それこそが、革命が葬り去ったと人が信じたもの、旧体制下に濫用され、
人々が懸命に批判したものです……それならちよつとあなたに質問したいが、今日、政治家の息子は、その親
の名や、その名に纏わるあらゆる利益や、その選挙民や、その人間関係、あちらこちらにある彼の地位、そして
学士院に於ける彼の椅子といったものを継承していないであろうか？ 結局、世の中は、誰かの息子と云う者た
ちで溢れかえっているではないか！ 何処を見回してもそうではないか、この息子らが、要職を占めてしまつて
いるが、すべてを通せんぼする存在はこのような形で生き残っているのだ……どうしてか、それはあなたもお分
かりの通り、風習が法律を猛烈な力で破棄するからだ……あなたと云う人は財産そのものだ、であなたは言う、
財産は聖域であると……なぜですか？ あなたは言う、我々は特権階級ではないと……ですが、あなたは既に貴
族じゃありませんか……しかも極めて真新しい貴族階級であつて、その厚顔無恥ぶりは、地球上で最も歴史の古
い貴族階級の無礼さを既に凌いでいる……現在も、また歴史上においても、生涯、二人より多く、ドアまで客を
送つて行くことのないさる大銀行家の執務室のなかより侮蔑を味わされるような宮廷は存在していないのだ！
あなたは、悪しき本能や悪しき情熱に就いて語る……ああ！ あなたは何をお望みのですか、ブルジョワ階級
の支配は魂を高揚させない……社会の上層が人心を分類、整理するとき、思想と云うものが出なくなり、下層で
欲求が高まる。かつてお金をより高い、あるいは同等の視点から相対化する何ものかがあつたころの、革命の

日々には、露骨に金銭を求めたり、あからさまに喜んで大金を期待したりせずに、旗色の変化や、衛兵詰所からの報告文、また勇敢で無心な勝利に喜びを感じる事が出来た……しかし、今日においては……今日、人は、パリの中心が何処であるかを知っていて、市庁舎の代わりに、銀行を挙げる……ああ！ブルジョワ階級は、大きな過ちを犯した……」

「どんな過ちですか？」ブルジョ氏はドノワゼルの長広舌に肝を潰して訊ねた。

「天国を天に残しておかなかった罪です、天が天国の位置なのに……貧者が、来世によって今生が報われるともはや思わなくなつた時代、民衆があゝの世の幸福をもちや当てにしなくなつた時代……ヴォルテールは非常に、持てる者に対して害を及ぼしましたね、お分かりの事と思ひますけれども……」

「ああ！おっしゃる通りですね！」とブルジョ氏は勢い込んで言った。「確かに……あの下々の者たちもミサには行くべきでしょうね……」

三十二

ブルジョ家で大きなパーティーが催されたが、その舞踏会を通して、近く行われる当家の娘とモブラン・ド・ヴィラクール氏の結婚式の報告がなされようとしていた。

「今日はまた、随分とお楽しみの様ね。上手にお踊りになつてよ！」ルネは大広間の隅でノエミにハンカチで顔を煽いでやりながら言った。

「ほんと、わたし、こんなに踊つたの、初めて！」そう言うとノエミはルネの腕を取り、小さな部屋へと連れて行つた。

「こんなこと、これまでに一度もなかった」ノエミはルネを近寄せ、抱き締めた。「ああ！ 仕合せになるって、何ていいことなのでしょう！」さらに喜びの熱に浮かされながら抱き締めて言った。「あのひとツたら、もう彼のこと、愛していかないの！ ああ！ わたし、確信できるわ、あのひとが彼をもう愛してないって！ 分かるでしょ、以前だったら、彼が同席するときには、彼が部屋に入って来れば立ち上がって愛情を表現したし……視線で、声で、息で、ドレスの音で、全身全霊で彼を愛で包んでいた！ 彼がいないときには、どうしてだか分らないけれども、あのひとの物思いや沈黙のなかに彼への愛を感じていたわ！……馬鹿ね、わたしって……そう思わない？ こんなことを、わたしがいちいち観察していただなんて、驚かしてしまったわね……だけどわたし、それらを通して理解できる事があるものだから」そう言うと、彼女はルネの手を取り、白いモアレのドレス越しに、心臓の辺りに置いた。「この動悸に偽りはないわ！」

「ということは、兄を愛しているのね？ あなた、今は」とルネが言った。

ノエミは手に持ったブーケの薔薇を静かにルネの唇に押し当てて、その口を閉ざさせた。

「お嬢さま、最初のルドヴァ（マズルカの種類）をわたくしと踊るのを、お約束くださいましたね……」

そう言って若い男がノエミを連れ去ったが、彼女はドアを過ぎる辺りで振り返り、指先を使ってルネに投げキッスをした。

ノエミの告白に、ルネは身内に歓喜の稲妻が走ったように感じた。ノエミの愛に満たされた微笑がルネの心に染み入った。ルネは開放感で、重い肩の荷が下りたように感じた。一瞬で、彼女にとってはすべてが変わったので、この、ノエミが兄を愛している！ という想念がそれまでであった全ての懸念を追い払ってしまったのだった。ルネはもはや恥かしさを感じなかった。この結婚にかねてから見出していた罪をもうや認めなかった。彼女は、ノエミは彼を愛している、二人は互いに愛し合っている……という言葉を繰り返しひとりごちた。あとは過去を

清算することだが、それは、ノエミがアンリを赦す事と、アンリがノエミに償う事で互いに忘れ去り得る過去であった。突然、ある思い出がルネに蘇り、心配ごとやぼんやりとした恐れが湧いた。けれどもその時、彼女は見通した先に陰鬱な何ものも見たがらず、将来に不安を抱かせる一切のものを認めたがらなかった。そんな思い出を追い払い、彼女は非常に素早くノエミと兄の方に気持ちに戻した。ルネは結婚の日のことや、二人が夫婦になったときの姿を思い描いて、二人の子供が自分を呼ぶであろう呼び方を空想し、かつてある子供がそのおばをおばちゃま！ と呼んでいた声を思い出すのだった。

「お嬢さま、どの曲でも結構ですから、一緒に踊る光栄をわたくしにお授けくださいますか？」
彼女の前で会釈しているのは、ドノワゼルであった。

「一緒に踊るの？ あたしたちが？ 互いに知りすぎているのじゃないかしら。そこにお坐りになれば……あら、何してるの、あたしの身繕いなんか気にしなくていいのよ……おやおや！ どうしてあたしのこと、そんなに見るの？」

ルネは白いチュールのドレスを着ていたが、七つフリルが付いていて、あちらこちら全体にわたって木蔦の葉や小さな赤い漿果があしらわれており、それらの模様は処女らしさを漂わせる服の胸の辺りや袖口のチュールのラッフルの上にも繰り返されていた。同じ小さな赤い実が幾つか付いた蔦の長い葉が、編下げ髪周囲に巻き付くように描かれており、両肩の辺りで緑の細長い先端が尽きていた。彼女はソファの上で、ちよつと頭をのけぞらし気味にして坐っていた。かきあげられた彼女の美しい栗色の前髪ほっぺの解れ毛は、艶のある額の上の方に掛かっていた。鈍く優しい輝き、柔らかく深い光が彼女の褐色の瞳から漏れていたが、瞼は閉じ気味で、目は潤んでいる為に、その視線がどちらに向けられているかは分らなかった。彼女の頬の上には光が戯れていた。やや吊り上げられた口の両端には軽く影が落ちていて、普段は一寸おごった感じのへの字をつくりがちの唇も、緩んでいて、

半ば開いて、心からの微笑を覗かせていた。光が顎に反射して輝き、首には、頭を動かすたびにゆらめく首飾りのような曲線を描いた影があった。そんな魅惑的な姿ながら、シャンデリアから降り注ぐ光の中で目鼻立ちは見えにくく、天真爛漫な子供のような幸福感から顔もほころびがちであった。

「ルネ、今夜はとても綺麗だよ」

「あら！ 今夜だけ？」

「ああ、そうも言えるだろう！ 正直言つて、ここのところずっと、ルネはとても心配そうで陰鬱な顔つきをしてきたよ……喜びの表情の方がルネにはずっとよく似合う……」

「そう思う？ じゃ、ワルツ、踊らない？」

「ぼくがワルツを学習済みであるかのように言うね、とても下手なのだけれど……でも、たった今、ぼくの申し出を断つたばかりじゃないか」

「あたしが、まさか！ とつても踊りたいんだから……それに、時間もあることだし……あら！ 懐中時計を見るのはやめて……あたし、いま何時なのか知りたくないの……ああ！ あたし、はしゃいで見えて？ そうだとすると！ それは間違いよ、はしゃいでなんかいないわ……あたし、仕合せなの……とても仕合せなの、ほら！……ねえ、お話して、ドノワゼル！……パリを散歩するなら、ご存じでしょ、ロレーヌ地方の縁なし帽を被つていて……家の正門の下でマツチを売っている老婦人たちのこと……ああいう婦人たちのうちの最初に出会った五人の一人ひとりに一ルイ金貨をあげてくださいませんか……その分は、あたしがあなたにお返しするから……あたし、貯蓄はあるのよ……お忘れにならないでね……まだワルツ、続いているかしら？ なんですって、まったく、あたしがダンスを拒否したくせにですって？ それなら、この曲のあと、全曲踊ってみせるわ……そして踊る相手は誰でも構わない！……彼らはみんなして醜く、同じ様なブーツを履いて、ロワイエッコ

ラールについてあたしに語り、背丈が小さ過ぎるか大き過ぎるか、あたしの肘の辺りに顔がくる人や、あたしの顔が腰の辺りに向き合う人がいたり、補聴器を付けていることや、脂性の手をしていたりすることで有名な人がいたり、あたし、そんな彼らすべてを受け入れてやるのよ！今夜のあたしの心構えはこんな具合よ、いつもはこんなに親切じゃないのについて人は言うことでしょうかね！」

二人がいる小部屋のドアが開いて男が顔を出した。

「ダヴァランド、あたしとワルツを踊ってよ」と言ってから、ルネはドノワゼルの隣を通過するとき、彼の耳元に囁きかけた。「見ての通りよ、あたし、身内の人から踊り始めるわ」

三十三

「今夜はまた、君のママンはどうしたんだい？」ドノワゼルがルネに訊ねた。そこには二人しかいなかった。モプラン夫人は横になると言って階上へ上っていったところだった。モプラン氏は、その夜、人々が作業をしている自身の小工場を検査かたがた一巡していた。「君のママンは、どうもご機嫌が……」

「ひどく機嫌が悪いと……はつきり言ってしまうでしょう……」

「彼女、何かあったのかな？」

「ええ！　そうよ」と言つてルネは笑い出した。「だって、ご覧の通り、あたし、ひとつまた結婚の機会を逃したのだから」

「またかい？　だけどそれが君の専門だからなあ！」

「あら！　でもまだたつたの十四回目よ……あたし、まだ平均を超えてはいないのよ……それに、あたしが失

敗した原因はあなたにあるのよ……」

「ぼくに？ 冗談じゃない！……それはまたどういわけたい？」

ルネは立ち上がって、両の手をポケットに突っ込むと、客間の端から端へと歩き出した。ときどき彼女は短く停止し、一方の足の踵を軸にして軽く口笛を吹きながら一回転した。

「そうよ、あなたよ！」ルネはドノワゼルの方へ戻りつつそう言った。「もしあたしが、二百万を拒否したって言ったら？」

「彼らはひどく驚いただろうな」

「でも、惹かれるものがなかったのだもの……実際より自分を大きく見せようとしてはいけないわよね……あなたといるときは、あたし、恰好ついたりしない……確かに！ そうなっていた、一時はあたし、気取った態度になりかかっていたのだけれど……そんな状況を取り繕ってくれたのがバルースさんで……とても親切だったわ……そうなると、分かるでしょ、今度は働きかけが始まる……ママンとアンリに猛烈な勢いで結婚するよう説得されたの。終日、うんざりした気分が晴れなかったわ……それから、心の中では、ちよつと夢想したりもしていたけれど……まあ、確かなのは、二晩にわたってよく眠れなかったこと……不眠症になるわよ、数百万という数字を考えていると！ また公平を期するために言っておかなくてはならない事があるのだけれど、そういうことと一緒に、パパのことをたくさん考えたわ……あたしがあの人と結婚したら、パパがどんなに誇りに思ってくれるかしらと！ 分るでしょ？ そうなればどれほどパパがあたしの十万里ーヴルの年金を喜んでくださることかしらと！……パパはあたしを自慢の種にしているから……覚えてるかしたら、パパが怒ったときの有名なせりふ、「わたしの娘を乗合馬車に乗せる婚なんて……」パパ、素敵だったわ！ そうして、あなたのことがい出されたのよ、そう、あなたよ……あなたの思想、あなたの逆説、あなたの理論、あなたがあたしに喋ったい

ろんな内容の言葉が思い出されたの……あなたの金銭への軽蔑……考えるうち、その軽蔑に呑み込まれてしまったのよ……それでおしまい！ ある朝、あたしは迷いから解き放たれていたの……あたしに影響を与え過ぎたのよ、あなたは、本当よ……」

「だけど、ぼくは……ぼくは馬鹿だよ……ああ！ 申し訳ない……あんな発言がそんなに功を奏すだなんて思ってもよらなかったんで、まさか……ねえ、本当に、ぼくのせいなのかい？……」

「そうよ、あなたのせいよ、まさしく……でも、ちょっとあの人も、あたしの心を動かした……」

「ええ！」

「そう、ちょっとルムニエさんもね……財産のことでひどく頭がいっぱいになってきたなって感じたり、ルムニエさんの奥さんになりたいなってもすごく思うときなんかには……彼を見詰めてしまったわ……だって何時かあなたが言っていた事は、決して本当ではなかったのだもの……自分が女なんだなあってことを感じさせてくれた人だったわ……あなたには分からない事よ！ そのことはひとまず置くとしても、彼は、あたしにはとても良い人に思えたわ……ほんと！ とにかく、とてつもない善良さんだから……あたし、彼を隅から隅まで観察してしまったの、だって彼の完璧さがしまいには気になって仕様がなかったんだもの……その結果！ 何の欠陥も無い！ あの人は、どこから見てもいい人なのよ！ ああ！ この調査結果から判断するに、彼はルヴェルシオンやその他大勢とは異なる男性であることが分った！ 想像してみても、彼、あたしにこう言ったの。(お嬢さま、あなたがわたくしを好きでないことはよく存じ上げておりますが、あなたがあと少しだけでもわたくしを好きになれるかも知れないと期待してお待ちするのをお許しください……) そんなことを言う彼に、あたし、ほろりとさせられたわ……数日間、あの人に(私たち、一緒に苦楽を共にして参りませんこと?)なんて言ってしまうかと迷いました。でも運が良かった、あの人があんな風にあたしを感傷的にさせたとき、向うからパパ

があたしを笑いたい気持ちにさせてくれたの……パパはとても変な顔付きをしていたわ、半ばは嬉しそうでもあり、半ばは悲しそうでもある、あのときのお父さまの優しさと言ったら……あんなに諦めきった幸福そうなパパは見たことがないわ……あたしを失う悲しみと、素敵な結婚をするあたしを見る喜びと……パパの中ではそれが渾然一体になっていたのね！ 結局、今ではもう全てが終ってしまっただけでも。おかげさまで！ 破談と決って、ママンがあたしとパパのことをじっと見たとき……パパはあたしを睨み付けた、あなた、お分りかしら？ あれは本当に怒っている目なんかじゃなかった……パパは、腹の底ではとっても喜んでいるの……あたしには、それが分かってよ……」

三十四

ドノワゼルはアンリ・モブランの家にいた。炉辺で、喫煙しながら二人だけで話しこんでいた。彼らは物音を聞いたが、それは控えの間で議論する声で、それから殆どすぐ後に戸が激しく開き、道を通せんぼしようとしている召使を押し返しつつ一人の男がいきなり入ってきた。

「モブラン・ド・ヴィラクールさんですか？」と彼が訊いた。

「如何にも、わたくしでござりますが」

そう言ってアンリは立ち上がった。

「それなら結構！ わたしは、ボワジョラン・ド・ヴィラクールと申す者ですが……」

と言うやいなや、その男の大きな手の甲がアンリ・モブランの顔を血で覆わせた。一撃のもと、激しく出血したアンリは、彼がネクタイ代わりに巻いている白いスカーフのように蒼白になった。アンリは相手に突っ掛かるう

として身をかがめたが、突然また身を起こすと、駆け寄ってきたドノワゼルを激しく腕を伸ばして制し、それから腕組みをして冷然と構えてみせ、非常に静かな声で言った。

「あなたのお気持ちは理解できていると思います……ヴィラクルを名乗る家が一つ余計にあるとお思いなのでしょうか？ わたくしも同様に感じております」

アンリの社交人士然としたこの冷静な態度を前にして、男は動揺し、部屋に入ってきてからもずっと被ったままだった帽子を脱ぎ、もごもごとひとこと何か言いかけた。

「どうぞ」アンリはそんな彼を遮って言った。「ご住所をわたくしの召使にお伝えください。明日、お返事に伺わせます」

「困った事になった！」アンリはドノワゼルと二人だけになると言った。「しかし、それにしても、あのヴィラクルはどこから出てきたのかね？ この名を名乗る者はないと聞き及んでいたのだがなあ……おっと！ 血が出ている」彼は顔を拭きながら言った。「なんて荒っぽい野郎だ！……ジョルジュ！」彼は召使に向って叫んだ。「水を持ってきておくれ……」

「君は剣を取るつもりなんだろう」ドノワゼルが訊いた。「ステッキを一本、取ってくれたまえ……まあ聞いてくれ……君は遠くに構えて、殆ど剣は交えない……あの男は血気にはやっているので、君に飛び掛って来るはずだ……君はそれを剣で円を描くようにして払いながら後退するのだ。そうして君が追い詰められたら、奴は君に猛烈な勢いで飛び掛って来るから、君は左足を利かせて右の方へ逃げ、そこで右足の爪先を軸にしてやや回転をして体勢を入れ替える……こんな具合にね……奴は眼前に敵を失い、君は奴を側面から捕らえる、そこで君は奴を剣で刺し通すのだ、相手が恰も蛙でもあるかのように」

「いや」アンリは顔の傷を拭っていた洗面器から頭をあげて言った。「いや……剣は使わん」

「だが、君、明らかにあの男は狩猟家だよ、飛び道具の使い方には慣れているはずだよ……」

「君、状況を考慮しなくちゃいかん……ぼくが、ある名前を獲得した、それは何れにせよ大した事ではない……ここにその名を盗んだと言ってぼくを告発する男がいる……ぼくは敵を作る事になる、その敵は結構な数になり、そのせいで噂が広がっていくだろう……ぼくはあの人物を殺さなくてはならない、それは明らかなのだ、それがぼくの地位を守る唯一の手段だ……ぼくはすべてを阻止する、裁判も、悶着も、悪い噂も、すべてをだ！そのために、どうして君はぼくが剣を取らなくてはならないと思うんだい？ 剣でなら、フェンシング道場で五年のキャリアを持ち、剣術に覚えがあるせいで、試合でもよくでくわす感じに相手に胸をさらすような男なら殺せるが、剣で突いてこず、飛び跳ねて、あちこち動き回り、攻撃を妨害されたら……怪我をさせる事はできても、それ以上は無理だ……それでは、ピストルはと言えば……ぼくはピストルは良く手入れしてあるのだが……自分の正当性を主張する為に言えば、ぼくはこの手の嗜みに関しては、かなりよく才能を磨いてあるのだ……そんなわけで、ぼくは、奴のここを狙おうと思うのだ」アンリはドノワゼルの腰のちよつと上のあたりを触った。「ここね、分るだろう？ なぜなら、もつと上を狙ったら、それではまずいわけで、腕で払われてしまう……ここで、沢山の細々とした必要と思われる箇所を撃つ代わりに……とりわけ膀胱が良い標的となる……もし命中させる事が出来て、しかもそれが満タンだったら……カレルの腹膜炎と同じ効果ですよ、君……そこで、君はぼくのためにピストルを調達してきてくれ……決闘は首尾よく終らせる、分かっているね？……秘密厳守と行きたい、前では誰にも知られてはならない……君は他に誰を連れてくる？」

「なら、ダルドゥイエはどうだろう？ 彼は国民軍の騎馬隊にいたことがあるので、彼の尚武の性向に訴えかけてみよう」

「それだ、非常に宜しい。それでは、君は前以てぼくの母の家に行つてくれたまえよ、母はぼくを待つ事になるわけだ。君は母にぼくは木曜日までは来れないと伝えるのだ……これからの数日間、母は僕やその仲間が突然現れるのを待つばかりだ……さて、ぼくはといえは、外出を控えて……もう少し人前に出るのに相応しくなるよう、髭を刈り揃える……そんな風に時を過ごせば、もう不用意に人目に付くこともない、それがいいよね？ 夕食を持つて来させて、今宵は今の自分の状況を筆に纏めるために費やす……ところで、もし君が明朝、奴の証人たちに会うなら、午後には戦つてもいいんじゃないか、四時なんかどうだい？ お互い、ケリをつけてしまいたいだろうから……明日は一日がかりだな、ぼくはここか、射撃場にいるから。君の都合のいい様に調整してくれたまえ、前以て礼を言うよ……四時でいいよね……それが出来そうなら」

三十五

アンリ・モプランが名前を貴族風にするためにその苗字に付け加えた農地の名は、奇妙ではあるが在り得ないこともない運命の巡り合わせにより、ロレーヌ地方の領土の名であると同時に、また嘗ては名を轟かせたが、今日では甚く閑却されているため皆から消滅したと信じられている一族の名であることが分かった。

アンリに平手打ちを食らわせていったばかりの男はヴィラクール家の末裔で、この家名はヴィラクールの封土と城に因むが、それらはサン・ミエルから三里のところにあり、遠い昔から彼らの所有にかかるものであった。

千三百三年、ユルリツシュ・ド・ヴィラクールは、ロレーヌ侯フェリーの遺言状に、この封臣の命令に従つて、自分の印璽で封印を施した三人の領主のうちの一人であった。シャルル豪胆公の下、メスの人々を打倒しようとして戦つたため投獄されたガントネ・ド・ヴィラクールは、もう馬に乗らないこと、武器を身に着けないことを

宣誓して初めて自由の身になったが、その後、彼は牝驪馬に跨り、水牛革の服を着て、重たい鉄の棒で武装し、より勇敢になり、より恐ろしい形相になって戦いに戻って行った。マユ・ド・ヴィラクルはジゴヌ・ド・マランとクリステイヌ・ド・グリゼンヌ・ヴを次々と娶り、大革命以前のコルドリエ・ド・サン・ミエル教会内には、二人の妻に彼が挟まれる形の三人の大理石像が見られたが、ルネ公爵は彼に、ビュルネヴィルの壊滅的な戦いのあと支払い義務のあつた身代金を清算させるためリニー市への援助金のうち八百フロリンを使用する権利を与えた。

マユの息子、ルマクル・ド・ヴィラクルはシャルル勇胆公に対して、ナンシーの市街の前でルネ公爵が起こした戦いで、千四百七十六年に戦死した。ルマルクの息子のユベール・ド・ヴィラクルは、バロワ地方の長老にして、バシニー地方の国王代官だったが、アルザスの戦争では大旗持ちの資格でアントワヌ公爵に従い、その間、彼の兄弟のボナヴァンチュールは聖フランシスコの戒律を厳格に遵守する宗教家で、三度、三年任期の修道会管区長となり、ロレーヌ、アントワヌそしてフランソワの三公爵の聴罪師にもなつたし、また姉妹のうち一人のサルモンはメスのサント・グロツサンド女子大修道院長に選ばれた。

ジャン・マリー・ド・ヴィラクルはフランス軍の兵役に専念した。ランドルシの戦いのあと、王は彼を騎士に叙任し、抱擁儀礼を行った。続いて彼は三百人の歩兵の隊長となり、王の主馬寮しゅまの役人として備蓄を供給されていたが、王は彼をヴォーククルーの王室料地管理官の職に、続いてラングルの総督職に任命した。彼の兄弟のフィリベールはシャルル九世の治世、フランスで傭兵となったドイツ騎兵の隊長となり、彼の他の兄弟のガストンはその決闘で名を馳せたが、パリのカルトジオ会の修道院の後ろで、四千人を前にしてシャンブルール將軍を二突きで殺したのが彼だった。ジャン・マリーにはもう一人、アグニユスという名の兄弟がいたが、トゥールの司教座聖堂参事会員やトネロワの司教代理になり、またさらにもう一人アルシャンジュという名の姉妹がいた

が、サン・モールやヴェルダンの尼僧院長となった。

そのあと、ギヨーム・ド・ヴィラクールが現れるが、ルイ十三世を敵に回すことになった。サン・ミエル市を守ったシャルル・ド・レノンクルの意に従わねばならなかったため、ギヨームは彼と四年に及ぶバステイーユでの監禁生活を共にしたのである。彼の息子、シャルル・マティアス・ド・ヴィラクールは千六百五十六年に、シャトー・サランの製塩所付の仕立て屋のクロード・ド・ジャンドランクルの娘のマリー・ディユードネと結婚した。彼は十四人の子供を授かったが、内十人はルイ十四世時代の兵役で亡くなった。ポンの連隊長だったシャルルは、フィリスブルグの攻囲戦で戦死した。ジャンはネールウインデンの戦いで戦死。ノルマンディーの連隊長であったアントワヌはオランダリアの攻囲戦で戦死。ジャックは賜暇でベルガルドに滞在していたときに起こった攻囲戦で戦死。ドーファンの連隊の擲弾兵の隊長だったフィリップはマルセイユの戦いで戦死。同じ連隊で隊長をしていたティボーは、オシユテの戦いで戦死。リヨネの連隊の指揮官だったピエール・フランソワはフルーリュスの戦いで戦死。ペリゴールの連隊で指揮官をしていたクロード・マリーはラ・オーグを通過中に死去。彼と同じ中隊で中尉だったエドムも同じ事件で死去。最後に、サン・ジャン・ド・ジェルザレム騎士団の騎士であったジェラルドと言えば、キリスト教徒の捕虜を漕ぎ手としたトルコの四隻のガレー船が、オスマン・トルコの皇帝に対して反旗を翻した際、その戦いに参加して千七百年に死去した。シャルル・マティアスの三人の娘のうち一人、リデーはエピナルの地方総督だったマジヤストルの領主と結婚したが、あとの二人、ベルトとフーベは嫁ぐことなくして亡くなった。

シャルル・マティアスの長男のルイ・エメ・ド・ヴィランクルは十八年間軍務につき、マルプラケの戦いのあと退役し、千七百二年に死去した。彼の息子はヴィラクールを去り、パリに居を構え、体制の一員となったが、父がダロクール家に対して起こした裁判に敗れた為に既にかなり目減りしていた財産の残りを使い果たしてし

まった。彼は相場で財産を立て直そうと試みたが、却って借金を作ってしまった、パリで賭博場を経営していたカール・ジュ出身の婦人と結婚し、ヴィラクールに戻った。彼は千七百五十二年に死去し、彼の所有していた物もはや棲み家である城館以外は殆ど残っていない、家名の威光は弱まり、面目は失墜し始めていた。

結婚した事で彼が授かった二人の子供のうちの一人は娘、もう一人は息子であったが、娘は王妃のお付きの女性となり、息子はヴィラクールに残って、粗野でかつ下品に振る舞いつつ田紳の生活を送った。千七百九十年の特権の廃止の時には、彼の領主権を放棄し、農民たちとは平等で仲間だという理念に則って生活し始め、そんな暮らしを貫いて千七百九十二年に死去した。彼の息子のジャンは千七百八十七年にはロワイヤル・リエジョワの連隊の中尉であったが、ナンシーの戦いに関わり、出国して、千七百九十二年から千八百一年にかけては後にロジェ・ド・ダマの中隊となる当時のミラボーの中隊やコンデ陸軍のブルボンの擲弾兵に加わって遠征した。千七百九十六年八月十三日、オベルカムラックの戦いで彼は頭部を負傷した。千八百二年、彼はドイツで結婚した女性とフランスに戻ったが、彼女は四人、男の子を彼に授けたあと死去した。

負傷したことで、彼の知能は弱まり、殆ど子供並みにまで下がってしまった。主婦のいない家庭内は少しずつ無秩序状態となり、彼の酒癖と饗応癖が祟って、城館を取り巻く僅かな土地を売らざるを得なくなった。城もまた最終的には部分的に少しずつ手放された。城館はもはや修復される事はなかったが、それと云うのは労働者を呼び寄せる資金すらもはや覚束なかったからである。館内は風に吹かれ、雨晒しになっていったが、家族は徐々に後退し、部屋から部屋へと引き移って、屋根がまだ持っている場所へと避難した。ところが彼はといえば、そういった事態に対しては全く頓着せず、嘗ての菜園で、古くなって時の目盛りが消えている日時計の傍の石のベンチに腰掛けてブランデーを二三杯あおったあと、日を浴び、晴れ晴れとした顔つきで垣根越しに飲み仲間を声をかけていたものであった。そんな間にも城館の荒廃と貧困は進んでいった。古い銀器のうちで残ったものといえ

ば、銀のサラダボール一つであり、それはドイツからの帰国の際に彼が連れてきた、一階の幾つかの部屋を自由に行き来していたブルスカと呼ばれている馬の飼料入れに使われていたのだった。

四人の子供たちは成長したが、雨風に晒され廃墟と化した城館同様、厳しい環境のなかで父親から省みられず、放置されており、教育といえは、主任司祭から二三回聖書の朗読を学んだ程度であった。農民たちの生活に浸って、彼らと仕事や遊びを共にすることを通して、四人の子供たちは本物の農民と化し、粗暴さや力強さに於いてもその土地で一番目立つ存在になっていった。

父親が亡くなったとき、四人の兄弟は皆で合意して、彼らの城館のまだ残っている石で出来た部分は不動産屋に譲ることにしたが、それと引き換えに得た数百フランで彼らは催促のうるさい借金を返済し、末弟が管理する頃には権利が尽きてしまうであろう五百フランの年金を手に入れた。それから彼らの嘗ての所有地の外れから始まっている森の中へと入り込み、そこで木樵たちと一緒に彼らと同じ様な生活を始め、彼らの粗末な小屋を棲家とし、彼らの中の娘たちを恋人にしたり同棲相手にしたりし、森にある種のあいの子の民を殖民させたのだが、その民にはヴィラクールと云う土地と自然が交わり、貴族と木樵が混ざり、その言語すらも最早フランス語ではなかった。

ジャン・ド・ヴィラクールが亡くなった際には、二三の軍隊時代の旧友たちが彼の子供たちの面倒を見ようとしてかなり働きかけた。非常に高い所から相当に低い所へ凋落してしまったこの家名が人々に関心を抱かせた。千八百二十六年には、まだ十六歳にもならない末っ子がパリに招待された。この小さな未開人は上等な服を着せられ、アングレーム公爵夫人に紹介され、戦争大臣のサロンにも二三回姿を現したが、大臣は嘗て少年の家族と交流していた事もあり、彼の為に何かしてやりたいと強く望んだ。が、一週間後、これらのサロンや服装に息が詰まる思いをした少年は子供の狼の様にそっと逃げ出してしまい、住処に帰り着くと、もうそこから出ようとは

しなかった。

四人のヴィラクルのうち、二十年が経過した後、生き残っていたのはたった一人であったが、それは彼であつた。彼の上の兄弟たちは次々に死去したが、三人とも皆、激しい最期を迎えたので、一人は健康を害すことで、一人は酒に溺れて、今一人は落雷で、それぞれ生命から引き離される様にしてこの世を去つた。彼らが残した私生児たちに囲まれて、ヴィラクル家の最後の末裔は、千八百五十四年に狩猟に関する法律が出来たときには、森の中で部族の長の様な地位にいた。法による規則、監視、裁判、罰金、押収、狩猟の束縛、即ち生活そのものの束縛、怒りに身を任せて、何時か狩猟用の重い弾丸を監視官に向けて撃つてしまふのではないかと云う恐怖心等々それら全てによつて、彼は、自分の故郷に、フランスに、もはや自分のものではなくなつたこの僅かな土地に嫌気がさしてしまつた。

彼の頭にアメリカに行こうと云う考えが浮かんだが、それは自由になり、広い土地を得、処女地で銃砲を携帯せずに狩をする為であつた。ル・アーヴルから乗船しようと思はずはパリまで出たが、大西洋を航海する為の金銭が不足していた。そこで彼はアフリカで我慢する事にしたが、そこでもまた、行政や憲兵や田園監視官等々フランスの影を見出す結果になつた。彼は土地を委譲させ開墾を試みたが、この手の仕事には向いていなかった。更にまた地理や風土に苦しめられ、天と地の焼け付くような熱さに、森の中で生まれた元氣旺盛の健康は損なわれてしまつた。そうして二年の後、彼は帰国した。

モット・ノワールの小屋に帰つて来ると、彼は自分の不在中に舞い込んだ唯一のものを見出したが、それは新聞一部であり、官報のモニトゥール紙の一年以上の号であつた。パイプに火を移す為に使おうとしてその新聞を手にし、それをひねつた拍子に、赤鉛筆で印が付いているのが見えたので、開きなおして印の付いている箇所を讀んでみた。

「モプラン（アルフレッド・アンリ）氏は、ヴィラクルの名でより人に知られている為、法務大臣に対して氏の名にヴィラクルの名を加え、今後モプラン・ド・ヴィラクルを名乗る許可を得る申請を行う意向を明らかにした」

彼は立ち上がり、歩き、息を切らし、そしてまた坐り、ゆっくりとパイプに火を点けた。

三日後、彼はパリにいた。

新聞を読んだ最初の瞬間、彼は真つ先に顔を鞭でびしゃりと打たれた様な印象を受けた。それから、心の中で思ったのである、自分の名は盗まれた、要はそういう事だ、自身の名はもはや何の価値も無い、それは今や或るならず者の名なのだ、と。だがこの整然とした思考は長続きせず、自分の名が盗まれたという想念は少しずつ彼の脳中に、より屈辱的で、苦々しく、苛立たしいものとして蘇ってきた。結局、思いは募り、耐え切れず出発した。

到着した時には、彼は牡牛のように怒っていた。そのモプラン氏とやらを殴り殺してやろう、と考えていたのである。だがひとたびあのパリに、あの街路に身を置き、あの群集、あの数知れぬ大衆、あの人ごみ、あの軒を連ねる商店、あの生活、あの通行人たち、あの喧騒を前にすると、彼は巨大なサーカスの舞台に解き放たれた猛獣が感じるであろう様な眩暈がしてきて、激しい怒りも最初の発作からそう長くは続かなかつたのだった。

彼は裁判所に出頭し、ロビーをうろろして、柱の傍に立っている黒服を着た男たちのうちの一人に近付いて声を掛け、自分の身に起こった事を打ち明けた。そこで黒服の男は、一年の期限が切れているので、名前の追加を許可する政令を相手取って戦うには、国務院に訴える以外ないと説明し、彼に国務院ならびに最高裁判所たる破毀院付の弁護士の名前と住所を渡した。

ヴィラクル氏は弁護士宅へ駆けつけた。彼が見出した男は、感情を面に表さないが礼儀正しく、白いネクタ

イを着け、緑のモロッコ革の肘掛椅子に反つくり返つて眠たそうな目をしながら、事件の一部始終、称号、権利、怒りに纏わる話や、彼が気の立った手つきでめくる羊皮紙の音に耳を傾けていた。聞き手の表情には、何の変化もなかった。ヴィラクール氏は話し終えると、自分の話が理解されなかったものと思ひ込み、もう一度、話を最初から始めた。すると弁護士は手振りですれを制してから言った。

「勝訴になると思われます」

「思われる、とおっしゃるのですか！……つまり確かではないという事ですか」

「訴訟というものは、常に訴訟なので御座いますよ」弁護士はある種の懷疑主義を感じさせる控えめな微笑を浮かべてそう言ったので、激昂しかかっていたヴィラクール氏は怯んだ。「そうでは御座いますが、どうあれ、あなたが有利ですし、わたしはあなたの事件を担当する準備は出来ております……」

「それなら結構です」ヴィラクール氏はそう言うが、証書の束を机の上に置いた。「それでは、宜しくお願い致します」

彼は立ち上がって挨拶した。

「申し訳御座いませんが」弁護士は彼がドアの方へ向って行くのを見ながら言った。「指摘しておかなくてはならない事が御座いまして、この種の事件で、国務院に提訴する際には、我々の立場は単なる弁護士のそれではなく、さらに顧客の代訴人と云うことにもなるのです。その場合、情報収集や証書の交付などに掛かる諸経費が発生します……そこで、もしわたくしが貴方の事件を担当するのをお望みでしたら、それらの経費をわたくしにお支払い頂くようお願いしなくてはならないのですが……ああ！ 申し訳御座いませんが、五百ないし六百フランになってしまいますが……なんでしたら五百フランで結構で御座います……」

「五六百フラン！……何ですと！」ヴィラクール氏は赤くなって言った。「結局、わたしの名前は盗まれた儘に

なってしまうのでしようね、だって、わたしから盗んだ奴がそのことを通告した新聞を早めに読んでおかなかつた所為で、こいつからわたしの名を取り戻す為に六百フランも必要なんですからね！……五、六百フラン！……ですが、弁護士さん」彼は両腕を下げ、頭を垂れて言った。「わたし、そんなお金、持っていないですよ」

「大変申し訳ないのですが……形式は守らなくてはならないものですから……だって！　そうかと言って、それ位のお金が見つからないものでもありますまい……貴方の家族が属してきた家系の子孫たちを当たってみれば……資金が調達できないなんてことはあり得ないと確信しますよ……この手の問題に関しては皆さん団結して臨んでおります……」

「弁護士さん、わたくしには知り合いいないのです……ですからヴィラクール伯爵は何も要求しないことになるでしょう……わたくしはバりに着いたときには、三百フラン所持しておりました。このフロックコートは、お宅に参る途中にパレ・ロワイヤルで四十五フランで購入しましたが……この帽子が七フラン致しまして……わたくしがこれから行く宿泊先では、推定ですが、二十フランは取られそうな気がしますし……地元に戻る為には二十五フランは掛かります……残高で、お出来になりませんか？」

「残念で御座いますが……」

ヴィラクール氏は帽子を被ると出て行った。が、彼は待合室のドアのところで回れ右をすると、食堂を通って引き返し、執務室のドアを再び開けて、聞き取りにくい、敢えて抑制した声で言った。「弁護士さん、ヴィラクールを名乗る、アンリ・モプラン氏の住所を、頂けませんかね？……ただで、なのですが……」

「問題ないですよ……彼は弁護士の肩書を持っていますから……手元にある筈です……ありました……テブ街、十四番地です」

ヴィラクール氏がアンリ・モプランの家に駆け付けたのは以上のような事情によつたのである。

当翻訳は以下に拠った。Edmond et Jules de Goncourt, *Renée Mauperin*, éd. Nadine Satiat, Flammarion, coll. GF, 1990, p. 186-207.